お試し番　バカとテストと海賊

ＦＯＯＬ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
お試し番　バカとテストと海賊

【Ｎコード】
Ｎ４４９６Ｚ

【作者名】
ＦＯＯＬ

【あらすじ】
思いつきでやってしまいました。ボクと皆とバカテス日常のキャラをゴーカイジャーに当てはめてみたものです。

ミズキの場合

……わたくしがその光景を目撃したのは偶然でした。宇宙帝国ザンギャックの目から逃げているうちに廃墟にたどり着いたようです。……これからどうするかそんなことを考えていた時に、争いあうような物音が聞こえて来ました。不審に思い、近づいてみました。そこで目撃したのはザンギャックの下級兵　ズコーヴィン達と４人の戦士の戦闘だった。その戦士達は剣と銃でズコーヴィン達を斬り伏せ撃ち抜いていく。ズコーヴィンの誰かが落としていた手配書から彼らが宇宙海賊だとわかった。

わたくしはその手配書を見て、あることを思いつき、彼らに声をかけていた。

「お待ちください。」

「誰だ？アンタは？」

青い服を着た小柄な女性がわたくしに問いかける。

「わたくし、ミズキ＝ド＝ファミーユと申します。」

その言葉に皆は驚いていたようです。

「……ファミーユって少し前にザンギャックに滅ぼされた、」

「はい。そのファミーユ星の王女です。」
「……で、その王女様が、僕達海賊に何のようなの？」
「わたくしをあなた方の仲間になりたいのです。」
赤いコートを着た方の問いの答えに、呆気に取られたらしい。
「あんた本気？おままごとじゃないのよ？」
「はい。それは良くわかっています。」
「……何で僕達の仲間になりたいんだ？」
「故国を失っても、ザンギャックと戦っている方もいます。わたくしはその方々の励ましになりたいのです。」
「そんなの、わざわざ海賊にならなくても、いくらでもあるでしょ？」
「いいえ。海賊だからこそ良いのです。」
青い服の少女の問いに先程の手配書を見せて答えました。
「海賊になれば手配書にわたくしの顔と名前が載ります。ファミーユ星の方ならそれを見て、励ましになるかと思います。」
わたくしの言葉に赤いコートの方が、笑顔を見せて答えました。
「気に入った。今から、お前は僕達の仲間だ。」

コウタの場合（前書き）

感想いただきました、鳴神　ソラ様、並びにこのお話を読んでくださりました皆様ありがとうございます。

コウタ「第２話は俺が海賊に加わった話です。」

コウタの場合

今は、感謝している。俺を赤色の戦士に引き合わせてくれた黄色の戦士に。

「あの～私達の船を直して頂けませんでしょうか？」

お嬢様の服装を来た少女が俺の所に訪ねてきた。立ち振舞いはお嬢様といっても差し控えはないが、その仕草に違和感を覚える。どうやらネコをかぶっているようだ。そして、彼女の髪を観察する。そのクセのつき方からすると、ポニーテールか何か一房に纏めて縛っているようだ。それを踏まえて、彼女をもう一度観察する。それで、彼女の正体に気付いた。そこに手配書が貼ってあるからだ。彼女の素顔が描かれているからだ。

「……今は、手が放せない。一時間以内に終らせるから待って欲しい。」

「わかったわ。」

彼女の了承に急いで、頼まれていた故障したものを修理して依頼主に返し、彼女の案内のもと赤い海賊船に連れて行ってもらった。

そこで見たものは信じられないようなものだった。色々なものがところ狭しと乱雑している。ごみ袋には燃えるもの燃えないもの関係なく入れられている。とどめに机の上にはピザの宅配の箱が。それを見た瞬間、何かが切れたような気がする。そして、気がついたら、既に部屋の片づけを始めていた。それで気付いたが、隅っこは拭かれておらず埃が溜まっていた。

「部屋を散らかすな！四角い部屋を丸く拭いたら隅っこが汚れたままだ！ゴミはちゃんと分別する！そして、栄養をちゃんと考えて食べろ！」

そう言ってから、机の上のピザの箱を片してから、食事を振る舞った。

「……美味しいよ。」

「ほんとだ。すごくおいしい。」

おいしいと言いながら食べてくれる海賊達。その光景に頬が緩むが、直ぐにここに来た目的を思い出した。

「……この船が壊れているって聞いたけど何処が壊れている？」

「あぁ。ごめん。そこのメインコンピューターがイカれてて。」

言われたものを確認してみたら単に電源が落とされていたらしい。ちょっといじっただけですぐに復旧した。

「おお！やるじゃん！」

「大した腕だね。」

二人の少女の言葉に気恥ずかしく感じてしまうなか、赤いコートの少年が問いかける。

「君の名前は？」

「コウ「ハカセでいいんじゃないかな？それっぽいし」」

それは名前じゃない。

「それもそうだね。」

それで納得しないで欲しい。

「よろしくハカセ。」

「よろしく頼むね。ハカセ。」

「よろしくハカセ。」

「よろしくよろしく。」

鉄で出来た鳥がしきりにそう言った。それが俺、コウタ＝ツチヤが海賊に加わった瞬間だった。

亮の場合（前書き）

感想いただきました、鳴神　ソラ様、並びにこのお話を読んでくださりました皆様ありがとうございます。

亮「次はゴォ～カイシルバーの須川亮の話です。」

亮の場合

気ままに散歩をしていた時、視界に女の子が、道路の反対側に咲いている花を取ろうとしているのが写った。さらに女の子に気づいていない車が走っていることも。

「危ない！！」

叫んでから女の子を助けようと、駆け寄る。間一髪で、成功して女の子を抱えて、反対側の車道に転がる。だが、どこかに打ち付けたのかこめかみから血を流していた。

「……大丈夫かい？」

女の子にそう問いかけようとして、俺の意識は闇に落ちた。

「……亮。……亮。」

俺を起こそうとする声に目を覚まし、辺りを確認する。そこは遺跡のようなものが並ぶところだった。そこに3人の戦士がいた。

「あなた達はジュウレンジャーのドラゴンレンジャーさんにタイムレンジャーのタイムファイヤーさんにアバレンジャーのアバレキラーさん？」

「よく知っているな？俺達の事を？」

「基本的なことです。それより、あなた達がここにいるってことは俺はもう死んでいるんですね？」

そう問いかけながら、落ち込んでいた。この世にいるはずの無い戦士達がここにいる。その無言の答えがさらに気を重くしてしまった。畜生。アイツを幸せにするって約束したのに。

「フッこんなときでも、他人の事が心配なのか？だが、そんなお前に久しぶりにときめいたぜ。」

アバレキラーさんはそう言ってから、携帯のようなものと、人形みたいでその下半身にカギが隠されているものを渡した。

「それはゴーカイセルラーとレンジャーキーだ。ザンギャックがまた動き始めようとしている。」

その言葉に俺の体は未だ生きているのだと理解できた。

「ドラゴンレンジャーさん。タイムファイヤーさん。アバレキラーさん。あなた達の無念は俺が引き受けます！あなた達の分も正義のヒーローとして、がんばります！」

その言葉に3人の雰囲気が和らいだような気がした。

「いい返事だ。亮。お前に俺達の大いなる力を託す。俺達の分もがんばってくれ。」

その言葉を聞きながら俺の意識は遠くなっていった。

ミナミの場合（前書き）

感想いただきました、鳴神　ソラ様、並びにこのお話を読んでくださりました皆様ありがとうございます。

ミナミ「このお話はウチが海賊に加わったお話です。」

ミナミの場合

ウチは不意をついて、見張りのズコーヴィンを殴り、気絶しているうちに金庫からザギンの札束を詰め込んでいく。さて、出ようとした所で、

「このぉっ！」

「きゃぁ！」

威力が足りなかったのか、目を覚ましていたズコーヴィンに頬を張られていた。悲鳴をあげながら床に倒れ、起き上がるより早く、ズコーヴィンに銃をつきつけられてしまう。死を覚悟して目を閉じた時、

ザシュッ！！

という音が聞こえたので目を開けると、赤いコートを着た少年と小柄な少女がいた。（ボクは男だよ。）……なにかが聞こえた気がするけど気のせいね。

「大丈夫か？まさか、僕達以外にザンギャックとケンカ吹っ掛けている奴がいるとはな。」

そう呟いて微笑んだ赤いコートの少年。その笑みに一瞬胸がドキリと高鳴った。

「気に入った。お前、僕達、海賊の仲間になれ。」

「は？」

唐突に言われた意味を理解できず間の抜けた声を発してしまった。

「お断り。海賊なんて割りが合わないもの。」

ウチの言葉に赤いコートの少年は驚きの言葉を口にした。

「そうかな？僕達の目指すものは『宇宙最大のお宝』だ。」

それは、誰もが一度は耳にしたことがあるはずのものだ。

「宇宙最大のお宝って、あの宇宙と同じ価値があるって言われているあの？」

「あぁ。」

その答えにウチは爆笑した。

「アハハ！バッカじゃないの！そんなもんおとぎ話に決まってるじゃない！」

「イヤ、ある。絶対に。」

「……それ本気？」

「あぁ。」

その真剣な眼にウチの夢は星ひとつを笑顔で満たすぐらいじゃ足りないくらいに狭くなってしまった。……『宇宙最大のお宝』を手に入れて、この宇宙を笑顔で満たしてみせる！

それがウチが海賊に加わった時だった。

モミジの場合（前書き）

感想いただきました鳴神　ソラ様、並びにこのお話を読んでくださりました皆様ありがとうございます。

モミジ「次は、ボクがゴーカイブルーになったお話です。このお話が皆様の楽しみになれば幸いです。」

モミジの場合

ボクはザンギャックから逃げ出していた。首には発信器付きの首輪がついている以上逃げ切れないこともわかっているそれでも、ボクを逃してくれたシド先輩の為にも逃げなきゃならない。

「いたぞ！脱走兵だ！」

くっ！ズコーヴィン達に見つかってしまった！こうなったら戦うしかないのか！

ズコーヴィン達と戦っている間に不意打ちを食らって、武器の片方を落としてしまった。そして、

ドォンッ！

銃声が響き、ボクの近くにいるズコーヴィン達が狙撃された。ボクはズコーヴィン達を狙撃した人物を見る。その赤いコートを着た少年には見覚えがある。

「……宇宙海賊？」

「ザンギャック同士で面白いことをやってるんだな？ボクも混ぜてよ？」

赤いコートの少年はボクにニヤリと笑みを浮かべて言った。

「それはいいけど、ボクは持ち合わせがないから礼は出せないよ？」

ボクのその言葉に彼は首を横に振った。

「要らないよ。僕が欲しいのは君だよ。」

ボクって、え？

「ご、ごめん！ボクはそんな趣味がないよ！」

「違うよ！君に僕の仲間になって欲しいんだ！」

成る程、そういうことか。

「とりあえず、その話は後だよ？」

「そうだね。」

赤いコートの少年は答えてから、こちらに近づく。ボクはズコーヴィン達を切り裂いて、取り落とした武器を拾い、互いに背中合わせになる。

何故だかわからないが、この時ボクは安心していた。それと少年が笑みを浮かべていたようにも思えた。

ズコーヴィン達を切り裂き、撃ち抜き互いに立ち位置を変えて切り裂いていく。そうしているうちに、ズコーヴィン達が全滅した。

「さっきの話だけど、断る。」

そう言ってから、ザンギャックの証のついた首輪を見せて教えた。

「この首輪は発信器にもなっていて、つけている限り、居場所がやつらに手にとるようにわかってしまう。無理に外そうとすれば電流が流れ、死ぬ。これで、わかったでしょ？ボクといるデメ「下らないこと言ってないでガマンしてよ？」」

ボクの言葉を最後まで聞かず、首輪を両手で掴む。

「止めろ！正気の沙汰じゃないよ！」

ボクの言葉を危機もせず、強引に首輪を引きちぎった。

流石に電流のダメージが大きくて、二人とも、倒れてしまった。

「僕には、夢がある。『宇宙最大のお宝を手に入れる』って夢が。なぜだかわからないけど、その旅に君を連れていきたくなった。来てくれないか？」

赤いコートの少年の問いの答えは既に決まっていた。

「面白いね。それ。ボクはコウヨウ＝カザミヤだよ。モミジとも呼ばれている。よろしくね？船長（キャプテン）？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4496z/

お試し番　バカとテストと海賊

2011年12月18日10時52分発行